一個の人生は何物にも価しない。
しかし、一個の人生に価する何物もない。
――アンドレ・マルロー『征服者』

大和心のかたちと秘密

――現代文明の変貌と真向かいて

竹本忠雄
（筑波大学名誉教授）

公益社団法人　国民文化研究会
令和五年九月二日、八王子市
「全国学生青年合宿教室」講演録

大和心のかたちと秘密

――現代文明の変貌と真向かいて

大和心のかたちと秘密

――現代文明の変貌と真向かいて

竹本忠雄

小序

去る二十世紀は、「国家間戦争」を予言したニーチェの言葉どおりとなりました。今二十一世紀は、「ふたたび霊性的とならなければそれは存在しないであろう」とのマルローの予言がそぞろ喚起されるような、人類の存続さえも危ぶまれる地球的闘諍の時代となりつつあります。

ノーベル文学賞作家カミュが言ったように「世界は破壊者と創造者から成り、われわれは創造者の側に立つ」とするならば、いかなる文化的理念のもとに崩壊に立ち向かうべきかが、かつてなく切迫して問われていると申せましょう。

それには、現代文明が如何なる変貌を遂げつつあるかを深層から省察し、では我が日本は如何なる寄与を為しうるかが問い

なおさなければならない道理であります。
本講演の講師は、前大戦下、下町大空襲で西欧ヒューマニズムの負の洗礼を受け、ここから、フランス留学に先立って禅林で日本と東洋の真価を学びなおし、東西対話を一生の命題として生きてきた立場であります。その間に実践的に蓄積した思索を生あるうちに――馬齢九十一ですので――些かでも若人に伝えたいとの思いで、国民文化研究会の小柳理事長に自ら願いで、第六十八回「祖国・学問・人生を語ろう！」合宿に講筵の場を敷いていただきました。
以下は、これに加筆修正をほどこした記録です。
幾分でもお役に立てばとの思いをこめて世に送ります。

令和五年十一月

竹本忠雄

目次

小序

たまゆら――美智子様御歌の輝き……4

日本の詩歌――対位法的詩法……11

水鏡する……19

「隠れる」と「顕れる」――死はない……27

ジャポニスムと禅――西洋に起こした二度の文化革命……35

「往く」と「還る」――日本的復活の秘密……38

「死ぬる」から「生くる」へ――ハネウサギの啓示……42
「行・知・視」のキリスト教三文明圏の形成……45
ビザンチン文化継承のウクライナとロシアの確執……49
「愛美」でむすぶ日本的霊性とギリシア正教……51
愛国より深い憂国……56
註……60

【質疑応答】

1　イリュージョンと記号……63
2　霊性文明における対話――騎士道と武士道……65

皆さん、こんにちは。

本日は、こうして、しばし浮世の喧騒を離れ、ここ多摩丘陵で青葉に囲まれて、普段あまり考えないような事柄を、考えないような角度からご一緒に考察してみたいと思います。「下天の内を比ぶれば」というほどのものではありませんけれども、離れて見るということは忙しい人生の中ではなかなかに出来がたいので、今日はまたとないこの機会に本質的な問題に光を当ててそれを試みてみたいと思います。

私と国民文化研究会とのご縁は、これで三度目の講義ということに相成ります。初期のころの講師のお一人に、小林秀雄先生がおられました。名講義は皆さんもお読みになったり、あるいは録音でお聞きになったと思いますが、何度聞いても読んでも、感ずることが多大です。一見したところ、たいへん意外なことをおっしゃっているような感じを受けます。いわば、あれだけの大思想家が、終始、「お化け」の話をしている。受講した東大生をはじめ俊秀の学生諸君は、さぞ驚かれたんではないでしょうか。

一見、そのような感じを受けるのですが、実は、一番大事なことをおっしゃっている、さすがだなと思うのです。古びた祠を無理やりにこじあけたら、真昼間なのに星がいっぱい見えたという柳田国男の例を引いておられます。そのとき、ヒヨドリがぴいと鳴かなかったら自分は発狂していただろうという挿話ですね。あれはいったい何なんだろうと問うています。

いま、挿話、エピソードと申しましたが、実はエピソディックなことではなくて、本質的なことを述べているのだと思うのです。

私ども、人間として悟性を持ち、理性を持っておりますから、信じがたい出来事が起こりますと、これをイリュージョン（幻想）としてほとんど自動的に退けようといたします。当然の反応なのであって、簡単に、無下にそういったことを信ずるほうがおかしい。しかし、あの講演で小林秀雄は、日本文化はむしろそうした信じがたいことを信ずる霊性の連続だったのではないかと暗示しているのではなかろうか。イリュージョン（幻想）かもしれない、しかし、もしも、そのほうがリアルだとしたらどうであるかと、こう問うて

おられるわけですね。

私自身、若いころにはなかなかそのようには考えられなかったのですが、長い人生を経て様々な体験を重ねていく間に、ここで小林秀雄の言っていることがよく分かるようになりました。のみならず、日本文化の本質はまさにそこで暗示されているところにあるのではなかろうか、と。

ひるがえって、今の世相を見ますというと、ウクライナ戦争を契機に、ふたたび原子爆弾が投ぜられるのではないかといった危機感がわれわれを掴んで離さないところにまで人類は到達してしまった。誰もが、いったいどうしてしまったんだろう、どこでわれわれは間違ってしまったんだろうというふうに自問せざるをえません。この場合、日本はどうなのかと考えることが私たち日本人にとってはたいへん重要となってきます。本日は、そうした現代の危機的状況を眼前に据えて、それでは人間はいかにあるべきか、日本はどうあるべきかということに思いを致したいと存じます。

たまゆら――美智子様御歌の輝き

司会からご紹介いただいた中で、平成の御代の皇后陛下、現上皇后陛下美智子様の御歌について触れられました。最初、私は、非常に美しい抒情歌という以上に特に深く感ずることはなかったのですが、年頭の歌会始と、年に二度、宮内庁から新聞紙上に発表される天皇皇后の御歌を拝見しております間に、特に美智子様の和歌について、これは私どもにとって想像もつきがたいほどのご心境に立っておいでの方の表白なのだと痛感するに至りました。そして、いつのまにか、自分の第二の母国語でありますフランス語に頭の中で翻訳しはじめていたのであります。これはきっと、かの地の人たちも感動するに違いないと、自然に信じられたのですから不思議です。そして、七十歳と二ヶ月という老躯を引っ提げてパリに向かい、三年余りかけて五十三首の御歌を翻訳し、出版させていただいたのですが、周囲から実に想像を絶するくらいの感動が湧き起こりました。

そもそもフランス人というのは極めて合理主義的種族でありまして、センチメンタルなことを嫌います。警戒したり、ときには軽蔑したりさえする。ところが、抒情味あふれる御歌の拙訳を読んで、名だたる作家が泣いたと言って、そのことを著名な雑誌の巻頭論文に堂々と発表する。あるいは、人によっては泣きながら電話をかけてくる、そういう信じがたい反応が次々に起こるのを見て、奇蹟に接したように私は驚いたのであります。

そういう自分自身、御歌の翻訳にたずさわっている間中、非常に澄んだ心境に立たされました。あたかもバッハのミサ曲を聞いているような、フーガの技法によって徐々に魂が昂揚し、別の世界に連れていかれるような思いを致しました。御歌の詞（ことば）の一つ一つが自然に即し、現実から遊離したことは一つもないにもかかわらず、いわば一オクターブ高いところに、魂が一次元高いところに達するような気分に浸されるのです。しかもこのことは、フランス語であっても、フランス人にとっても変わらないのだと感激させられました。

そこから、なぜであろうかと考えを深めて今日に至りました。皆さまのお手元にお配りした美智子様の御歌は、そのほんの一端にすぎませんし、たぶん御歌集『瀬音』でご覧になっていることとは思いますが、いったい何ゆえ、どこからこのような高みへと誘われるのであろうかということを、実例に基づいて最初に考察してみたいと存ずる次第です。

「たまゆら」と勝手に名付けさせていただきましたが、美智子様御歌は、しばしば、上の句と下の句の間に、何か瞬間的に影のようにちらつくものが詠みこまれ、これに属する詞がキーワードのように入っているかに拝されます。ここを転回点として、そこから、われわれの生きているこの現実世界、リアリティから、目に見えない別のリアリティへと誘われていく、マジックのようにその転換が起こるということに気づかされました。

たまゆらを　古き世の火の　色揺れて
　をちこちの野辺　焼かれてあらむ

この御歌におきましては、古代と、目の前の野火の広がりの時とが一つに結ばれ、「色揺れて」がこのむすびのキーワードとなっています。

彼方なる　浅き緑の　揺らぎ見ゆ
我もあらむか　陽炎の中

一読、私は、これはなんと美しい歌であろうと感じました。フランス語訳の本、『セオト　せせらぎの歌』がパリで出版されまして、お茶の会に私は皇后さまからご招待にあずかり、帰国して参内いたしましたときに、どんな機会にこれをお詠みになったのですかとお尋ね申しあげましたところ、皇后さまはお笑いになって、それは実はオウム真理教の事件のときのことですと仰せられたのです。皇居にもサリンがまかれる危険があるというので、宮殿の窓にも目張りをして、恐ろしい思いをしておられたそうですが、そんなあるとき、お庭に出て、濠に鳥が浮いたりもぐったりしているのを見ながら、不

安な気持ちでいたときの歌ですと、当時のご心境を語ってくださいました。

しかし、このことは、表には伝えてはならないことだったらしく、日本語版の拙著『祈りの御歌』の原稿のこの部分は宮内庁のチェックにより削除されましたので、初めてここで皆さんにお話しするわけです。まさかオウム真理教のことでご心琴をそのようにお悩ませになっていらっしゃったとは存じあげないことでした。いずれにせよ、ご動機はそういうところにあったにせよ、御歌ではぜんぜんそれは感じられません。いつのまにか、ご自身が彼方の陽炎の中に立っていると、いわば別次元の中にトランスポートして見ていらっしゃるわけです。「浅き緑の揺らぎ」をとおして、ですね。やはりここでも転移が起こっているのです。

次の一首は、特に名歌として世上に名高いお作品です。

岬みな　海照らさむと　点(とも)るとき
　弓なして明る　この国ならむ

これを読んだ人は、みな、感動で絶句します。なんという美しいヴィジョンであろうと。誰もこのように日本列島を見た人はありませんね。

これもまた、あるとき、私は、皇后さまからお電話を頂戴して伺ったことなのですが、以前は灯台守の人たちを皇居に招いていろいろ話を聞いたが、だんだんと灯台の数が少なくなったので、そうした変化を踏まえて詠んだ歌であるとのご感懐でした。現実の三次元的な空間からでは絶対に見ることのできない光景を、幻視していらっしゃる。そこから、日本列島を「弓なして」と捉えられました。日本列島をそのように見た人は他に皆無ですね。まことに意味ふかい暗喩と申さざるをえません。一つまた一つと、岬に灯台の灯が点っていって、全部点ったならば――という条件法のもとに上の句が詠われ、「点るとき」というキーワードのもとに下の句で大きな転換をお詠みになっておられるのです。

次の御歌も同様に、私ども国民を非常に感動せしめたところのものです。

海陸（うみくが）の　いづへを知らず　姿なき
　あまたの御霊　国護るらむ

先ほどの「岬みな」は「海」というお題で読まれたものですが、この「海陸の」は、お題があえて「終戦記念日」と記されております。ということは、何を隠しましょう、それより八年前に昭和天皇がお詠みになり、そしてその御製を最後にお亡くなりになった事実上の辞世とも申すべき御製があり、いわば、これへの返歌として皇后美智子様がお詠みになったのに相違ないと私は拝しております。

やすらけき　世を祈りしも　いまだならず
　くやしくもあるか　きざしみゆれど

昭和天皇はこのようにお詠みになり、年が明けて、もう一つ普通の叙景的

な歌を詠まれて、お隠れになりました。そのときの「くやしくもあるか」という、大御歌としては想像を絶する、肺腑をえぐるばかりの絶唱を遺され、これをやはり「八月十五日」と名付けておられたのです。それまで昭和天皇は靖国神社に詣でることの叶わぬ御身を繰り返し嘆いて、十五年間に連歌として発表してこられました。そのフィナーレが「くやしくもあるか」の御製で、実にこれをあえて終戦記念日と題された。その八年後に、美智子様はこれへの返しを詠まれたのです。誰もそう気づいた人はいませんが、私はそのように固く信じて、物に書き記してまいりました。

日本の詩歌——対位法的詩法

このように、日本には返歌という伝統があります。そもそも辞世というものがあり、歳月を経てこれへの返しを詠むこともあるのです。いちばん有名なのは、浅野内匠頭の切腹のときの辞世、

風さそふ　花よりもなほ　我はまた
　春の名残を　いかにとやせん

でしょうか。若い身空で死んでいかねばならない、この春の名残、無念をどうしたらいいのかという嘆き、問いかけです。この歌が赤穂城で披講されるや、家臣一同、慟哭して即座にその真意を悟ります。そして、決意して、二年後に赤穂浪士の討ち入りとなったわけですね。一首の和歌の力で、まさに力をも入れずして天地をも動かしたという奇蹟が起こったのです。

硫黄島で栗林忠道中将が「…矢弾尽き果て散るぞ悲しき」と大本営に打電し、散華されました。それからちょうど五十年の歳月を経て、天皇と皇后美智子様が硫黄島を訪ねて、こもごもに感動的な手向けの歌をささげられました。返歌を返されたわけです、実に五十年経って、ですよ！　このようなことは世界中どこにもありません。そもそも辞世なるものが日本にしかないの

です。なぜ日本しかないのか。この問題もあまり考えられたことがありませんね。しかもそれだけではない。二年経って、仇討ちが行われる。五十年経って、天皇皇后が直々に鎮魂の歌を返される――考えてみれば、これは空恐ろしいほどの日本文化の超越性なのです。

つらつら思うに、辞世と返歌のコレスポンダンスは、『万葉集』の中の大伴家持の「海ゆかば」の歌を、後世、特攻隊員が本歌取りとして出撃するにあたって詠んだ和歌が七首をも数え、その間、実に千二百年あまりを数え、五十年どころの比ではありません。奈良時代以後の幾多の時代を超えて切々たる思いが伝わり、それに応えた。生死、歴史を超えているのです。これが日本であり、ほかにはありません。「あまたの御霊国護るらむ」の思いひとすじが途絶えたことはないのです。

「海陸の」の御歌から、かなりの時を経て美智子様が詠われた名歌の中に次の一首があります。

生命ある　もののかなしさ　早春の
光のなかに　揺り蚊の舞ふ

この御歌も、最初は新聞をとおして発表されたのを拝誦したのですが、目にふれた瞬間、私は金縛りになったような衝撃を受けました。わずか三十一文字の中にこれほど深いいのちの幻影を歌ったものがあろうかと――。それからしばらくして、東日本大震災が起こりました。

ここでも「早春の光」がキーワードですね。光が淡いということで、はかないいのちと呼応しています。こうして蚊柱を立てて舞っている生き物が、一日のうちに死んでいく、なんという悲しさ、いのちの悲しさであろうかと――。ここまでは普通の感情です。いや、普通の歌は、だいたいここまでですね。皇室の方々は皆さま歌をお詠みになり、歌会始でこもこも雅なお作を発表なさいます。しかし、そう申しては失礼ながら、大御歌を除いては、尋

常の叙景歌、抒情歌がほとんどです。しかし、美智子様の御歌だけは全く違うんですね。

この場合も、ただ悲しいと言っているだけではない。この「かなしい」は、「sad」というだけのものではないのです。喜びでもあるのです。なぜなら、「舞ふ」と仰っている。ただ死んでいくのではない。舞っているのです。これが愛であり、歌であり、命なのですね。

このようにお詠みになるとき、美智子様はかならず「人間も」とお考えになっているに相違ありません。人の一生は浮き沈みがあり、悲喜こもごもであり、幸不幸が限りなく重なっていく。そして、死んでいくときに、あるいは不幸だけが多かった人が死んでいくときに、その人の人生は全く無であったのだろうか。しかし、ひととき舞うことはなかったであろうか。その最高の喜び、美の頂点においてわれわれは人生を見るべきではなかろうか——。

眼を転じて、西洋の芸術家の中で、いちばんそのようにいのちの秘密を掴

んで表現した人は誰かと言いますと、画家の中では、レンブラントであろうと思います。もっとも、印刷した絵では十分に伝わりませんので、ぜひ、ルーヴル美術館なり、アムステルダム美術館なりで本物を見ていただきたいのですが、レンブラントの絵を見ますと、人生をその頂点でとらえているということがよく分かります。人間とは限らない。「生命あるもののかなしさ」であります。ルーヴル美術館に「引き裂かれた牡牛」という絵があります。四肢を伸ばして金釘にぶらさがっている、肉屋で見るような光景を描いたものですが、黄金色に光を発している――これがレンブラントなのですね。

かつて私は、若いときに、アンドレ・マルローから得た特訓の中で、「生きているということが芸術である、真の芸術は生きている」と教わったことがありました。そのとき、レンブラントを例に挙げられました。私は留学生活に先立って、かの地、オランダで三か月間滞在し、毎日のようにレンブラントの名作と対面していたのですが、いかにマルローの言葉が真実であるかをひしひしと思い知らされました。そのことが思い出されてきます。「光のなか

に揺り蚊の舞ふ」なのです。

西洋の哲学、特に実存主義哲学に言わせれば、「人間は、生きて、死に向かっていく存在である」との定義でした。サルトルがそう書いたのに対して、マルローは注釈して、「死に向かって」(pour)を消して、「抗して」(contre)と書いたことがありました。英語で言えば、「フォー」ではなく「アゲインスト」ではどうかということですね。ある意味で日本人の感性も似たところがあります。人間は生き、荏苒(じんぜん)と死に向かっていく存在であるとは、われわれは考えないのです。では死をどう考えるのか。そのことを今日は一つの命題として呈したいと思うのですが、そのために美智子様のこの「揺り蚊」の御歌はたいそう参考になります。

皇后美智子様は、お一人だけでなく、天皇陛下とともに一対の歌を多く詠まれました。私はそれを「二重唱」とお呼びしておりますが、次の御歌もそうです。陛下がご隠退なさる直前のころのお作品です。

君とゆく　道の果たての　遠白く
夕暮れてなほ　光あるらし

ここで、「遠白く」とはっきりおっしゃっています。いうまでもなく、藤原定家が最高の和歌の姿として定義した遠白体を思い起こさせられます。

いつも両陛下が散歩なさる皇居の道を、そのとき、お二方は辿っておられました。「道の果たて」は、美智子様の心象の中で、おそらく、生きることの果てと重なっていたことかと拝察されます。夕暮れになって、しかし、道の先がほのかに光っている。ご自身の人生を、もちろん、重ねてお考えでありましょう。「光あるらし」ということですね。その先に何があるのかということさえ暗示されているかのように感じさせられます。その先は無ではないのです、光なのです。いのちの終わりは無ではなくて、光なんですね。どんなにそれがほのかであろうとも、です。

このようにざっと拝見しただけでも明らかなように、美智子様の御歌は、

上の句と下の句の間で一種の転移が行われることが際立っているかのように感じさせられます。音楽における、いわば対位法でしょうか。これほどはっきりとそれをお示しになったお方は皇室の中でも稀ではないでしょうか。これは美智子様の詩学、アール・ポエチックであるとともに、しかし、つらつら思えば、実は、日本古来の歌の伝統でもあるのではなかろうか。そしてそこに、大和心のかたちとともに或る秘密が表れているということはないであろうか――このように考えさせられるのです。

水鏡する

かくしてぞ　人の死ぬとふ　藤波の
ただ一目のみ　見し人ゆゑに

『万葉集』のこの歌の詠み人はさだかではありません。これは個人的に私

が大好きな歌でして、この前後に恋歌がいろいろとありますが、むしろ平凡なものばかりの中で、この歌だけは全く違います。たった一目だけ、ある人を見た、そのために人は死んでいくということである――と、文字の上からだけ捉えればそれだけの意味で、いわゆる国文学の解釈ではそのようです。では、「藤波の」とは何かといえば、これは枕詞だと、それだけです。二種類にかかる枕詞であることが分かっていまして、一つは、藤はツタだから、まつわりつく。そのように思いが纏綿としてある人にかかっているという意味である、と。もう一つは、「藤波の」は「ただ一目」にかかる枕詞だというんですね。分かるようで分かりません。枕詞を単なる属詞と考えている間は、私たちはこの歌の真意は取れないだろうと思います。

藤の花は日本原産と言われています。『万葉集』の歌人は桜と並んで藤の花を歌っています。しかし、桜にしても、だいたい、山桜ですね。遠くにあるのを見るということです。いまのように近くで鑑賞するのではない、霞か雲かというふうに遠目で見る。いっぽう、藤の花は、風に揺れる姿が美しい。

色も徐々に褪せていくところが得も言われぬ。何より、高貴なイメージをあたえる、これが重要です。

高貴なる、貴なる、ですね。貴に美しい人を一目見たならば人はそれで死ぬという、私も――「かくしてぞ」――そのような、藤の花の揺れるような、ほのかに揺れるような揺らぎをとおして、そのように高貴な方を見たゆえに、死んでいくのであろうと、そういう意味です。

しかも、そこで終わらないんですね。死んで悔いはありませんと言っているのです。つまり、この歌は、潔さを詠んでいる。それが私どもを打つのですね。

「藤波の」とは、だから、非常に重要な、本質を伝える「シーニュ」、記号であるということです。上の句と下の句の結び目に置かれ、転回点を示すキーワードになっているということです。

次の紀貫之の歌は、ただいまのこの歌を謂わば本歌取りのようにして歌われていると見ることができます。

山桜　かすみの間より　ほのかにも
　見てし人こそ　恋しかりけり

これはもう、このとおりの理解でよろしいかと思います。先ほども申しましたように、桜は山桜であった。ということは、見る人がなければ美しいのか美しくないのかも分からない…。遠目の桜で、霞か雲かと形容されるが、実はこの形容のほうが本質である。日本的美学の核心が表れたヴィジョンと申せましょう。

もう一首、典型的な古歌を引きます。藤原定家の

春の夜の　夢の浮橋　とだえして
　嶺に別(わか)るる　横雲の空

です。

ここでは転回点は「とだえして」です。途絶える、ということですね。つ

い今まで長々と夢を見ていた、夢の浮橋を自分は渡っていた、が、目覚めるともうそれは思い出せない、目覚めて見るのは目の前の山の嶺にたなびく横雲であるという、これもまた見事な二つの違う次元の熔接(ようせつ)です。「とだえして」というキーワードで、実は結んでいるわけです。「ちぎる」と同じです。キーワードと言い、結びと言い、転回点と言い、これを一つの詩の技法として駆使することによって日本の和歌は生まれたという点が大いにあるように考えられます。

問題は、それがいったい何を意味するのかということです。そして、そのような転回点、二つの異なる位相をむすぶ点、その行為を何と呼んだらいいのか。学問的にはどのようにでも名付けることができましょうが、しかし、日本人でなければならない何かいい表現がなかろうかと考えて、私が見いだしたのが、「水鏡する*1」という素晴らしい言葉でした。

この言葉は、能の研究家、三宅晶子氏がお書きになった能の現代語訳の著

書の中にありました。つてをとおして、これは日本の古語ですかと尋ねましたところ、そうではなくて、明治・大正になって現れた表現であるように伺いました。いずれにせよ、めったに聞くことのない美しい表現と思います。水鏡は分かります。しかし、「水鏡する」というのは独創的ですね。何をこれは意味するものでしょうか。

この言葉の元を掘り下げて考えてみますと、新しい何かが見えてきます。「鏡＝かがみ」とは「影見＝かげみ」から来たといわれます。影を見るということです。往古は、青銅器で鏡が作られ、表面を磨いて物が映るようにしました。そもそも鏡に対して日本人は古来、非常なこだわりを持っていて、考古学の発掘で鏡がいちばん出土するのは日本で、中国でも朝鮮でもないことが分かっております。戦後あるとき、「竟」という一字が書かれた木簡が掘り出されたことがありましたが、これは「鏡」の古字で、日本最古の木簡だったということであります。

私は筑波で教鞭をとっておりましたときに、大学院で影と詩の関係の研究

をさせたことがありました。中国人留学生たちが提出してきたレポートを見ますと、中国では影を特別に詩に詠うということはありませんとのことでした。この点、日本人は確かに違いますね。フランスでは、「影＝オンブル」と言えば、亡霊です。まつわりついてほしくない。ところが日本では、「影を慕いて」と逆に執着しているところが面白い。古賀メロディーのように、「影を慕いて、雨に日に」と――。

青銅鏡が発明されるまえが、水鏡でした。しかもそれは、自分の顔を映すとはかぎらなかった。ここが大事なところです。むしろ何物かが顕れてくるのを視る行為だったのです。天孫降臨にあたって、女神アマテラスが、「我を崇むるがごとくこの鏡を崇めよ」と八咫の鏡を授ける場面がありますね。この鏡を見れば、そこに我が映るであろう、視つめる汝ではなく――との玄意ではありますまいか。

こうした神話的、すなわち根源的ヴィジョンを承けて、さながら『万葉集』の数首が詠まれたかのように思われます。

わが妻は　いたく恋ひらし　飲む水に
影さへ見えて　世に忘られず

これは、防人の歌で、ぐっときます。飲む水に映っているのは自分の顔ではなく、妻の面影である、妻が自分を恋い慕っているんだな、どうして忘れられようか――との切なる思いですね。

相手が自分を思っているから鏡に顕れる。これが、自分が相手を思っているから夢にも顕れるということになると、『古今集』です。さらには、『万葉』と『古今』を隔てるものはその違いではなかろうか。彼、我を思うゆえに、我その影を見るという心理は、まだ文字が生まれる以前の縄文時代の人々のヴィジョンが生きているように思われます。

向こうから、見えない世界から何かが見えてくる、影向（ようごう）するということは、たいへん大事で、現代ではほとんど失われてしまいましたが、大和心はそれを継承していたのだと私は言いたいように思います。

そしてそこには、現代において失われてしまった何事か本質的に大事なものが秘められているのではなかろうかと。

なぜなら、二十世紀から二十一世紀にかけての文明の変貌を一言でいえば、断絶の深化というものではなかろうかと思うのです。至るところに断絶を見ます。不条理の哲学は最たるものでした。これに対して、大和心は、そうではない。命が果てて灰になるのではない、いのちは別の何物かになる、そして継承されていくというのが大和心なのではなかろうかと思うのです。そして現代に必要なのは、この考え、ヴィジョンではなかろうか、と。

ちなみに、西洋の先端的思想もこの方向に来ているように思われます。死は終焉ではなく「変貌」、メタモルフォーズ（métamorphose）だと見る見かたです。「科学が死を問いはじめたとき」（A・マルロー、一九七六年）の新概念と申せましょうか。

「隠れる」と「顕れる」——死は終わりではない

さて、和歌の中には、いままでお話ししてきたような見かたが成り立ちませんと理解しがたいものもあります。その一つの例が

かはづ鳴く　甘南備川に　影見えて
今か咲くらむ　山吹の花

です。

有名な国文学者、折口信夫は、これは蛙の鳴いている甘南備川に山吹の花が影を落として、いままさに咲こうとしている光景であると説明しています。しかし、おそらく、そうではないんですね。「影見えて」の後に山吹の花が咲くのです。これは、見えない世界からの、アマテラスの影向であると正解を下したのは、山本健吉です。「甘南備川」がこの理解のキーを与えてくれます。

日本中のあちこちに甘南備という地名があり、甘南備川という川が流れています。神が宿るような美しい土地、また、川という意味ですね。神宿るこ

の甘南備川に、きらきらと黄金色の光が映っている。ヒルメノミコト、すなわち天照大神の影向である。それと呼応して、岸辺の山吹の花がこれからまさに咲き出ようとしている、その金色が映ろうとしている…と。

上の句と下の句の間の「影見えて」を接点として、まさに水鏡として、現実界と超越界のコレスポンダンスが生じているのです。

「影向」と申しました。これはまことに意味ふかい言葉でして、今日は美術に触れる時間がないので省略しましたが、平安時代の仏画に来迎図というのがあります。「二十五菩薩来迎図」、「山越阿弥陀図」などが有名ですね。一九二二年に来日したアインシュタインがこれらの絵を見て感動し、ここに表れた原始的な仏教思想は中国にはない、非常によく日本が分かるという言葉を残しています。仏教思想は、中国では極めて哲学的なものとなったが、たしかに日本にはそうならせないものがあった、それが大和心ということです。

生まれるの「生」と書きまして、古語ではそれを「むすぶ」と読む。また、

「あらわれる」と読みますね。日本人の元来の思想の中には、「ビーイング」という意味での「ある」という思想はなかったようにみえます。何かが「産ぶ＝むすぶ」、というヴィジョンであって、「在る」ではなかった。

西洋哲学はそこで行きづまってしまった観があります。「ある」という動詞を定義しようとすると、「ある」とは何々であると、定義しなければならない言葉を使わなければならないパラドックスが生ずると指摘されています。

大和言葉では、「顕れる」があるのと同様に、「隠れる」があります。柿本人麻呂の

ひむがしの　野にかぎろひの　立つ見えて
かへりみすれば　月かたぶきぬ

これも、一般的解釈からすれば、東の方向に太陽が昇り、かげろうが立ってきた、後ろを振りかえれば月が地平線に沈んでいくと、こういうことです

ね。これだけでも壮大なヴィジョンですが、しかし、それだけではないように思われます。それだけではないのは、「かぎろひ」にあるのです。影の「か」、霧の「き」です。日本人の感性は謂わばカ行変格でして、影、鏡の「カ」、霧の「キ」、雲の「ク」、気の「ケ」、心の「コ」ですね。かすかな、揺らぎをとおして世界を見る見かた、ヴィジョンが優先していますから、この朦朧たるヴィジョンをとおして日月が顕れ、隠れていく、旋回していく、この壮大なムーヴメントが感動を誘うのです。

次の柿本人麻呂の歌の中にも同様の回転のヴィジョンを見ることができます。

天の海に　雲の波立ち　月の船
星の林に　漕ぎ隠る見ゆ

実に美しい詩的ヴィジョンだと思います。科学的に見れば、星の林に月が

隠れるはずはありません。そんなことは人麻呂も百も承知で、その矛盾をあえて承知で何を言おうとしたのかといえば、「月」が隠れていく先の、見えない宇宙の広大さということです。

中国文学者の吉川幸次郎さんから、日本の詩歌にあって中国の詩にはないものは、空を渡っていく天体を詠んだ詩であると聞かされたことがあります。そこで私はこう申しました。先生はそうおっしゃるけれど、ただ渡るんではないでしょうと。渡って、そのかなたで、どこかへ隠れていくと捉えるのが日本的感覚なのではありませんか、と。すると、さすがに幸次郎先生は即座に、

ほのぼのと　明石の浦の　朝霧に
鳥隠れゆく　船をしぞ思ふ

の歌を例に挙げられました。

この歌は『古今集』の中に柿本人麻呂の歌として繰り入れられていますが、定かではありません。実際は、詠み人知らずでしょう。ですけれども、「隠れ」のヴィジョンあるゆえに人麻呂伝とされたのであろうと私は考えております。

隠れるとは、死ぬことへの日本的表現と言っていいでしょう。大津皇子の歌、

百傳ふ　磐余の池に　鳴く鴨を
今日のみ見てや　雲隠りなむ

が思いだされます。大津皇子は天武天皇の皇子で、次の天皇になるべき御方でした。しかし、日下部の皇子と並び立つことあたわずして謀殺されます。三十数人の家臣とともに。まだ二十歳そこそこの奥方も、悲報を聞くや、駆け出して身を投げてしまわれた。そういう悲劇の直前に詠まれた辞世です。

いくたびも私が足をはこんだこの磐余の池に、鴨が鳴いている、それを見るのも今日かぎりで自分は消えていくのだという、悲痛きわまりない歌です。しかし、死ぬとは仰っていない。

後世、松尾芭蕉が「海暮れて鴨の声ほのかに白し」と詠んだ俳句にはこの歌の光の残映が見られるとの識者の指摘もあります。

日本人の感性からすると、死するのではない、隠れるということです。ということは、いつかまた顕れないともかぎらない、復活がないとはかぎらないということになります。これはたいへんに大事な思想ではなかろうかと思うのです。いっぽう、キリスト教西洋にとって最重要事は、死せるイエスの復活ということで、イエスが復活しなければキリスト＝救世主はありえなかった。

われわれ日本人は、特に復活ということを言いません。死は生の終わりではないと考えるまでです。分断がない。隠れるということです、あくまでも。

ジャポニスムと禅——西洋に起こした二度の文化革命

これは間違った考え、迷信であろうか。そうではない、むしろ意味ふかい考えのように思われます。なぜそう言いうるかと申せば、現代文明はかつてない変貌をとげつつあり、まったく逆説的に一個の霊性文化を標榜していると言えないこともないからであります。

霊性、スピリチュアリティとは、一言でいえば、分けない、非二分性の世界ということです。精神と物質、生と死、主観と客観を分けない、両者を統合した世界を霊性と呼ぶ根源的ヴィジョンの上に成り立っている世界観で、そのような世界観を西洋は否定してきました。端的にデカルト主義と呼ばれています。

これに対して、日本文化は本質的に非二分性の文化であるということが近現代において二度にわたって西洋に伝えられました。一度目は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての謂わゆるジャポニスムの流行です。北斎や広重

の浮世絵版画とともに俳句のあたえた影響は絶大でした。いや、「影響などというものではなく、あれは革命だったのだ」とマルローは言っています[*2]。世界と人間の要約的一体化といった日本的ヴィジョンに世界は驚愕したのです。二度目は一九六〇年代の禅の普及です。禅はインドで生まれ、唐・宋（中国）で育ちながら、しかし西洋に広がったのは日本の禅だったのです。呼び名もサンスクリット語の「ジャイナ」でもなく、漢語の「禅那」でもない、日本の「ゼン」という言葉でした。もちろん、これには、当初、ひじょうな警戒、抵抗があり、それは殊にアングロ・アメリカ系に強かったのですが、それにもかかわらず西洋は禅を採り入れていきました。しかも、大いなる畏敬の念をもって同化していったことの意義は、いかに強調しても強調しすぎることはありません。

こうした大変化の裏には量子力学による世界観の革新があったことを認めないわけにはいきませんが。

政治と戦争による分断にもかかわらず、また、いかに緩徐たろうとも、こうした目に見えない霊性上のファクターの活動と絡んで現代文明は変貌しつつあるのであって、これと大和心のかたち、即ち日本文化の意義がかつてなく問われていると申せましょう。

その意味において、和歌と俳句は大和心のかたちの中心にあります。そしてそこには或る秘密が秘められているのです。

先ほど、芭蕉の句を引きましたが、「隠れる」の感覚においては芭蕉は『万葉集』を継承しています。「ほととぎす消行方（きえゆくかた）に島一つ」などはそうですね。

「隠れる—顕れる」という心のはたらきは、『古事記』の冒頭から実は告げられていたと見ることができます。「幽顕に出入す」と、巻頭に出てきます。見えない世界「幽」と、見える世界「顕」が出入りする、と。主語は曖昧ですが、現代のわれわれの目からすると、幽顕あわせて霊性という観を受けます。

ともあれ、「幽」は隠れた世界、いわば神道祭儀の領域であり、「顕」は政治と申せましょう。「まつりごと」の両面です。大国主命の国譲りの神話が伝えるとおり、大国主命の出雲は幽の世界を司り、大和朝廷は「顕」の世界、政治を司るという振り分けが争いなくして成り立ったところに大和心の何たるかがこの上なく明らかに表れでています。つまり、神話以来、大和心は和の上に成り立っている。いっぽう、西洋の神話は永久闘争と断絶の上に成り立っていると見ることができます。

「往く」と「還る」——日本的復活の秘密

同じ竜退治でも意識が違うのです。日本神話におけるスサノオノミコトは竜を退治し、姉君アマテラスと対立していたけれども、最後に天上に帰り、宝剣を奉って和解しますね。ところが西洋神話では、ヨハネの黙示録の中に

ありますように、悪の権化であるドラゴンと「太陽を背負った女」とが死闘を演じ、世の終わりまで戦いつづける。ドラゴンとはサタンの化身であり、サタンとはアンテ・キリスト（偽キリスト）、転じて「反キリスト」です。最後には神が、ゴッドが勝ちます。だが、そのときはこの世界も終わりなのです。これが西洋の神話なのです。

ある意味からして、私どもの現実世界は神話の反映です。古代ギリシアにおいては、地上の民族と民族が戦うときは、先立ってそれぞれの神々が天上で戦うと信じられていました。私は、これは正しい見かたではなかろうかと思いますね。いま、現実の世界で起こっている出来事は、どうやら西洋神話の反映らしい。このままでいけば、世の終わりまで戦争は続くほかはない。最後に辛くも善が勝利を収める、だが、同時にそれが世の終わりであれば、勝ったってしょうがないですね。

日本の神話が勝つか、西洋の神話が勝つか、ある意味で二つの根源的ヴィ

ジョンが火花を散らし、世界の運命はそこにかかっているともいえるでしょう。

顕れる—隠れる、幽顕に出入する、あの世とこの世を往還するという根源的ヴィジョンを突きつめて創造した芸術が、日本では世阿弥の能です。有名な「複式夢幻能」[*3]なるスタイルがそれです。西洋人の感性からしますと、死んだら死んだきりで、戻ることはありません。私は、留学生のときに、ソルボンヌのゼミで、日本の往還の思想について禅を踏まえて話しましたところ、指導教官のジャン・グルニエ教授がたいへん驚いて、西洋にはそのような思想はないと言っていました。あの世に行ったら、行ったっきりなんですね。戻ってくれば、出戻り、「ルヴナン＝幽霊」と呼ばれるだけです。

複式夢幻能においては、主役、シテは、前段で現れるときは違う姿で現れますね。里の女であったり、汐汲み女であったり、笛吹き男であったりする。

諸国一見（いちげん）の回国の僧が歴史的ゆかりの地を訪ねますと、まず最初にそのような姿の者と出会います。ところが彼らは、自分は前世がこれこれの人物であったところの亡霊であると名乗り、後段で、その前世の姿に戻って舞台に登場する。役者にとって、その変容する場所が「鏡の間」であるわけです。観客に見えないところで役者が等身大の鏡の前にひとり立つ。「水鏡する」んですね。そこに、別なもの、本性が見えてくる。役者はそれに成りきって、後ジテとして舞台に再登場し、前世の最も美しい姿で舞うのです。

その変容のきっかけを「モノギ」（物着）と呼んでいます。能の名作『井筒』では、里の女、実は前世で或る貴人の娘であった亡霊が、形見に残る恋人（在原業平）の衣装を抱きしめ、井戸の水に自分を映す――水鏡する――瞬間が「モノギ」で、その瞬間、水面に自分ならざる恋人の面影を見て、狂乱的に変身するのです。

この「水鏡する」変異点、これは、和歌における上の句と下の句の中間の、

あのキーワードに通じます。二つの異なる位相をむすぶ対位法ですね。大和心は、和歌と言い、能と言い、そのような独創的変容のフォルム、「かたち」を持っていて、そこに秘密を蔵していると申せましょう。

「死ぬる」から「生くる」へ――ハネウサギの啓示

そのことを最も知っていた映画監督が黒澤明ですね。あの『生きる』の名場面がそうです。癌に侵された惨めな役場の老課長が、もう死ぬしかない、飲んだり遊んだりして虚しくすべてを忘れようとする。ところが、遊び相手の若き女性がハネウサギのおもちゃを見せてくれる。あゝ、これだと男は悟る。そしておもちゃを抱えて二階から階段を下りてくる。すると、「ハッピー・バースデー」と合唱する女子学生たちの唄声が起こり、誕生日を祝われる子が下から上ってきて、志村喬の演ずる男と踊り場で擦れ違う。老課長は、見違えるようにうららかな表情で、ハネウサギを抱えて踊り場から下りてくる

…

素晴らしい変容の瞬間を黒澤監督は描いたのです。さっきまで死ぬる身であった人間が、生きるのです。死ぬのではなくて、その瞬間から、生きる。ぜんぜん違いますね。この場合、ハネウサギが彼のモノギ、水鏡であったことになります。そこから彼は違う世界に入っていった…

もう一つ、別の例を引きましょう。アンドレ・マルローの那智滝行です。西暦一九七四年五月二十七日、マルロー一行は紀伊半島を縦断して、熊野に到着しました。そこで那智の滝を前にして彼は何を見たか。

それより三、四日前に、マルローは東京の根津美術館で国宝「那智滝図」を見ていました。そのとき彼の口をついて出た最初の言葉は「アマテラス…」ということでした。本物の滝を見て自分はいよいよその感を深めたよと、あとで彼は私に述懐しています。

那智の滝を見て「アマテラス」と言った人はマルローしかいません。その

とき、滝は彼にとって水鏡だったのではないでしょうか。そこに彼は「日本の天帝が降りてくる」（『非時間の世界』一九七六年）その影向を見た、ということです。

これは言いかえれば、ある光景がただのイリュージョンではなくて導きのしるしになる瞬間がある、ということを意味します。ある人々にとっては、それが別世界に入る一つのキーに、マジカルなキーになるということで、人生は、実は、そのような瞬間に満ち満ちていると申さねばなりますまい。ある現象をイリュージョン、幻影と見るか、徴（しるし）と見るかで、意味は、人生は一変するのです。もしそれをしるしと見なければ志村喬の演ずる惨めな課長は死ぬるしかなかった。ところが、あの踊り場で自らの水鏡を見て謎を読み解いたがゆえに、生きることができた。死ぬるが生きるになったのです。

われわれ人間には、いつもそのようなチャンスが残されています。おそらく、民族にとっても同様です。

「行・知・視」のキリスト教三文明圏の形成

今日は人間を単位にして話をさせていただいてまいりましたけれども、日本国というふうにして考えた場合も全く同じというふうに私は考えます。なぜならば、わが日本国も、歴史に躓きました。戦争をし、敗れ、不幸になりました。どうしてそうなったのか。端的に言って、日本が日本でなくなった、自らに背いたからなのです。どのように日本が日本でなくなったかといえば、もともと大和心というものはそのようなものでないのに、西洋伝来の理知におぼれたがゆえにとしか言いようがありません。

しかしながら、ここで注意を要します。今日はそのことを最後に申しあげずしてお話を終わるわけにはいかないので、急いで付け加えさせていただきます。

西洋々々、キリスト教文明と一口に言いますが、本質的に三つに分かれます。大きくは、西欧と東欧の二つです。ひっくるめてヨーロッパですね。日

本にとってなじみのあるのは西欧のほうです。西欧は、フランスを中心とする中欧と、スペインを中心とする極西に分かれます。

日本も含めて世界に広がっていったキリスト教の大半は、ヴァチカンに本山のある中欧のそれです。これはバイブルの教義主体です。それと、教会、神父です。日本で言えば、仏・法・僧に当たります。これが日本に入ってきたキリスト教の主体です。

いっぽう、東欧に広がったキリスト教は、大本山がアトス山にあり、そこでは、視ること、ヴィジョン、幻視が中心とされました。見えないものを見る。なぜならば、東方教会の始祖は『黙示録』のヨハネだからです。ヴァチカン中心のキリスト教の初祖はペテロで、三番目のスペインに広がったキリスト教の初祖はヤコブです。

ヨハネ、ペテロ、ヤコブは、キリストの三大弟子ですね。福音書が告げるとおり、あるときイエスはこの三人を山頂に連れていった。すると、そこに旧約の預言者たちが顕現し、イエスの変容（トランスフィギュラシオン）が

起こる。顔が真っ白となり、別人となる。この大変なヴィジョンを三弟子は見るのですが、絶対にこれを口外するなと戒められます。しかし、口外したからこそ、いま私もこうしてしゃべっているわけですね。

「山頂の垂訓」として伝えられるこの神秘現象は非常に重要な暗喩的意味を持っています。それは、イエスが旧約の預言者たちの正統的な継承者であることを告げるとともに、三弟子による、その後の世界への霊性的伝導の振り分けをも意味するものであったからです。

ペテロは、その名も「岩」だから、岩のようにしっかりと頑丈な教会を建てよと命ぜられる。ヤコブには「行」を通して伝えるように、ヨハネに対しては「幻視」重視をそれぞれ振り分けたのです。

このうち、霊性的見地から、現代において最も意義ふかいのは、ヨハネです。ご存じのとおり、ゴルゴタの丘でイエスが十字架にかけられたときに、眼の前に三人の最親愛の人物がいました。イエスの母マリアと、イエスの愛してやまなかった女弟子、マグダラのマリアと、最愛の弟子、ヨハネです。

ヨハネに向かって、お前は「女」を、すなわち自分の母マリアを連れて逃げよと命じ、ヨハネはこれを実行して、のちに『黙示録』を書きます。黙示録、アポカリプスとは、ギリシア語で「啓示」を意味します。ヨハネは世の末までの人類史のヴィジョンを見て、書き、啓示した。このヴィジョンとは永久闘争のそれでした。

西暦八〇〇年に、ヨーロッパ最大の英雄であったシャルルマーニュ大帝（英語読み、カール大帝）がキリスト教世界の統合者、西ローマ皇帝としてローマで戴冠し、ヨハネ、ペテロ、ヤコブの三弟子のそれぞれの使命に従ってヨーロッパ文明を制度化しようとはかりました。これを遠因として、先に申しあげたような東欧と中欧と極西欧の三つの文明圏に分かれてキリスト教世界が形成されていったのです。

われわれの日本に伝わってきたのは、主として真ん中のペテロの系統でした。教義主体のこの系統は、一言で漢字で書けば、知識の「知」です。ヨハネから東欧圏に来ているのは、幻視の「視」で、極西のスペインに行ったの

は、これはヤコブを始祖と仰ぐ錬金術的行道の「行」です。はなはだ乱暴な言いかたながら、ヨーロッパ文明を漢字で書けば、「行・知・視」になるでしょうか。

このうち、われわれに伝わってきたのは、この「知」の世界なんですね。日本はその影響下に明治維新を行い、発展し、そして躓きました。

東欧はどうなったか。ヨーロッパは四世紀に東西ローマ帝国に分裂し、西ローマ帝国は五世紀に滅びるが、東ローマ帝国は一四一四年まで存続します。ローマ帝国が滅びるのに千四百年かかったということですね。

ビザンチン文化継承のウクライナとロシアの確執

東ローマ帝国は、ギリシアのビザンツを中心としていたので、別名、ビザンチン帝国とも呼ばれます。ヨハネ由来の「視」、幻視、ヴィジョン中心のキリスト教は、ここからギリシア正教と呼ばれ、ビザンチン帝国に広まってい

きました。このビザンチン帝国、すなわち東ローマ帝国の皇帝の妹アンナを十一世紀にキエフ公国のウラジミール大公が娶って、ロシアから切り離されたのが、現在のウクライナの起こりです。大公が国教として採り入れたのがヨハネ由来のギリシア正教だったのです。

ロシアはどうなったかといえば、ジンギスカンの孫に占領されて二百年あまり、「タタールのくびき」と呼ばれる過酷な運命に置かれました。拉致され、殺され、奴隷にされた。その血が今のロシアに伝わり、ウクライナと戦っているということです。

ですから、メディアで私たちが伝えられつつある「全体主義」ないし「権威主義」と「民主主義」の戦いという対立図式の奥に、もう一つ別の見かたがあり、この霊性的視点から見ると、事は別の様相を呈することとなります。

ヴィジョン優先の霊性文化をウクライナは継いでいるということです。言い換えれば、神々を信ずる文明と、それを否定する文明が鬩(せめ)ぎ合っている図

式となりましょうか。ウクライナの守り本尊は「ウラジーミルの聖母子像」で、セント・ソフィア寺院に祀られていたが、あるときからモスクワに移されてしまいました。

「愛美」でむすぶ日本的霊性とギリシア正教

霊性文化的見地から見てそのように相反するウクライナとロシアが死闘していることに、私は、政治・軍事の観点からでは説き明かせない何かしら玄妙な意義を感じるものです。それは、ウクライナの存続に、ヨハネ由来のギリシア正教文明圏の存続の運命がかかっているということであります。しかし、この宏大なエリアはわれわれの眼から洩れてきてしまっていました。ロシア革命以後の七十三年間というもの、それはソ連圏だったからです。一九九一年、ソ連崩壊により、抑圧されてきた信仰の復活に希望が甦り、虐殺されたロマノフ王朝の皇帝夫妻を聖人聖女に祀ろうとする人々が森の墳墓に長

い列をつくるようにさえなりました。しかし、その夢もつかのま、エリツィンに代わるプーチンの登場によってスターリン時代の弾圧へと戻ってしまったのです。

ウクライナが対ロシア戦争で勝つか否かに、「知」に対する「視」、合理偏重の在来文明に対して霊性復興によるバランス回復をもたらしうるや否やがかかっていると、私は見ます。そしてそこに、さらに、日本の使命が問われている、とさえも——。なぜなら、ヴィジョン優先の世界観において、ほとんど世に知られていないことながら、ギリシア正教思想と大和心は相通じているからにほかなりません。

それは、「厭離穢土」的な現世否定により彼岸での救済をもとめる西方キリスト教思想とは反対に、「フィロカリー＝愛美」と呼ばれる自然美への愛をとおして超越界を志向する東方キリスト教思想が日本的霊性と一致することを意味します。たとえば俳句精神にそれを見ると、フランスにおけるカトリック・ギリシア正教双方の最高権威、オリヴィエ・クレマン師は指摘していま

す。

いかにも、和歌・俳句を中心に、日本伝統文化のかたち（フォルム）は対位法的に二つの位相をむすぶ秘密の力を蔵していることを私たちは見てまいりました。マルローが那智滝で「アマテラス」を幻視したのも、それに先立って国宝「那智滝図」というフォルムを見て、それを導きの記号、徴として実相観入したからにほかなりません。

こうした日本的観入のスタイルについて「水鏡」という美しい呼び名があることを、私たちは知りました。

ギリシア正教における信仰の至高のかたち、「イコン」は、実に彼らの水鏡にほかならないと申せましょう。

本日は、この場で、イコンについて語るゆとりはありません。ただ、東欧に広がった信仰とは、特に聖母子像のマリアを視ることによるヴィジョン優先のそれであり、マリア顕現という奇蹟がそこから生まれたことだけは指摘

しておきたいと思います。多くの聖堂が幻視から築かれ、この風習は、オスマン・トルコの侵略を逃れた教父たちによってイタリアへと伝わり、十二世紀ごろにローマを中心に建てられた大聖堂の大半はマリア顕現の幻視を縁起としたほどでした。

通常は、「ビザンチン文化」という名で、宗教あるいは美術の観点からのみ採りあげられるこのような事柄を、なぜ、いま、私がこの場で語るのかと申せば、中世という偉大な霊性時代――これは法然から日蓮に至る日本の同時代に通じます――が二十一世紀のわれわれの現代の行く手を照らしているからにほかなりません。十九世紀半ばから二十世紀にかけてヨーロッパから世界中に弘まった「マリア顕現」という奇蹟現象は、東欧由来のイコン崇拝に端を発し、ルルドでベルナデッドが視たマリアも、彼女自身の告白によればイコン風の容貌でした、つまり、ラファエロ描くところのルネッサンス様式のものではなかったのです。

こうした事実を知った画家ピカソは驚愕して、なぜビザンチン風なのだ、

これは一つ考えてみなくちゃならんと呻いたと言います。

影向するマリアは、生きていると、すべての幻視者たちが証言している点が注目されます。そしてしばしば未来を予言し、その中心は、ファティマの牧童が聞いたそれのごとく「ロシア」でした。いかにロシアを「回心」させるか、と――。

現代最大の奇蹟と称してはばかりないこのマリア顕現の現象について、アルプスからピレネーにかけてその霊場を回り歩いた自分としては、もうちょっとお伝えしたいのですが、ここではもちろん差し控えます。ただ、マリオロジー（マリア学）の専門家の間では、この現象の背後にあるものは、「太陽を背負った女とドラゴンの戦い」として幻視された、かのヨハネ黙示録の根源的ヴィジョンであるとして捉えられていることを付け加えておきたいと思います。

愛国より深い憂国

日本の使命についても、同様に、歴史的に見ただけではとらえられない何かがあろうと思われます。それは要するに大和心の表れであり、本居宣長が『玉勝間』で述べたとおり、お隣の唐国（からくに）、つまりチャイナが「こちたきひがごと」の国であるのと正反対の国であるということです。「こちたき」とは、仰々しい、片腹痛いということですね。現代風に申せば、中国は、片腹痛いイデオロギー国家だということになります。

こうした日中の本質的相違を最初に暗示したのは紫式部でした。『源氏物語』で初めて「大和魂」という言葉をもちいて、それを唐渡りの「才（ざえ）」として対せしめています。

西洋から見て日本をどう理解するかということは、中国と日本はどう違うかと理解することが、ほとんど大半を占めています。ノーベル文学賞を受けたフランスの詩人、サン＝ジョン・ペルスは、「中国があれば日本はなくたっ

ていいじゃないか」と言っていました。これに対してマルローは面と向かって、こうたしなめています。「そうじゃないよ。中国と日本は、愛の観念、死の観念、音楽の音階、この三つの点で根本的に異なっているのだ」と。そう見る人は稀でした。しかし、いまや世界はこのことを学びつつあるのではないでしょうか。

日本と中国は、漢字の使用を除いては何の共通点もないということが、だんだんと世界中に分かってきたということです。次なる、より深い理解は、天皇に対して下さるべきでしょう。昭和天皇が、先にも申しあげたとおり「エレミアの悲歌」にも比すべき「裕仁の悲歌」の詩人であることを知ったなら、依然として一部に抜きがたい反日プロパガンダによる誤解は変化するのではと考えられます。正しく伝えられるべきは、明治天皇をはじめ、歴代天皇の大御歌に貫きとおすうれたみ（慷み）の御宸憂であります。

「愛」と「憂」の違いが世界を二分しています。

三島由紀夫の名作『憂国』を英語なり、フランス語なりに訳しますと、「パトリオチズム」となって、これは「愛国主義」です。愛国じゃありませんね、憂国は。

愛国だけなら、プーチンでも言う。超愛国です。何も知らない国民は熱狂する。他国民は、いくら殺してもいい。反対に、「憂」は、自らを律する、自刃に至るまで。憂国とは武士道の日本です。

世界史に憂国の系譜を辿ろうとすれば、旧約聖書の大預言者にまで遡らなければなりますまい。エリア、エゼキエルのような。彼らはすべて憂国の士でした。これを聖書は預言者、プロフェットと呼んだわけですね。

われわれにとって憂国の士とは、預言者にほかなりません。日本は、憂の思想の国です。いま、突きつめなければならないのは、憂の思想のほうです。

最後に、アンドレ・マルローのある一言を皆さんに贈り物として、終わりたいと思います。彼はある書物でこう書いています。

一個の人生は何物にも価しない。
しかし、一個の人生に価する何物もない。*4

「しかし」と言わせるものは何か、ということです。この転回点を映しだす水鏡を、私たちは、めいめい、持たなければならないということであります。

註

＊1（23頁）水鏡する――能楽研究家で横浜国立大学名誉教授の三宅晶子氏著『対訳　井筒』（檜書店）19頁の以下の記述に拠る。「有常の娘（後ジテ）は、（…）井戸に水鏡すると、そこに映っているのは他ならぬ業平の面影であった。」

＊2（36頁）（浮世絵版画がフランスに与えたものは）「影響などではない、革命だったのだ」――一九七四年五月十六日、最後の来日中にアンドレ・マルローが東京の朝日講堂で行った講演、「芸術の変貌」中の言葉。

＊3（40頁）複式夢幻能――通常のこの呼称に対して山本健吉は「往還能」との呼び名を提唱した。本講演の講師はこれに賛同する。

＊4（59頁）「人生は何物にも価しない。しかし、人生に価する何物もない」——アンドレ・マルローの小説『征服者』中の言葉。正確には、「一個の生は何物にも価しない。しかし、一個の生に価する何物もない」。原文は次のごとし。

Une vie ne vaut rien.
Mais rien ne vaut une vie.
André Malraux *Les Conquérants*

質疑応答

1　イリュージョンと記号

【質問者】　今日は本当に深いお話をありがとうございました。最後の結論で水鏡を持たなきゃいかんと、私はそれはどういう意味かはっきりしなかったんですけれども、われわれは宇宙の生命によって生かされて、水も宇宙の生命の働きというか、そういうことを「水」というふうに表現されたのかなと勝手に解釈したんですけれども、それでよろしいでしょうか。

【竹本】　宇宙と言っていただいたのはとても適切かと思います。われわれの社会は極めて唯物主義的に出来上がっておりまして、それは信じられないほどの厚い、硬い岩盤から成り立っております。それを突き崩すのは容易ではないのです。でも、突き崩さなければ別の世界は見えてこないんですね。その方法を、日本は日本なりの方法を持っているということで、「水鏡」と申したわけです。

この宇宙なるものも、宇宙船の飛び交うようなハード・サイエンス的宇宙

だけなのであろうか。何と言っていいのか、われわれ人間にとっては、もう一つ別の現実というものがあるのではないか。経験的には、それはあると言うことができます。私も拙い自分の人生で、それを確認して生きてまいりました。

最も偉大な方としては、お釈迦さまがそうですね。インドの哲人、ラジャ・ラオという人が言った言葉に、釈迦は経験主義者であるということがあります。仏典に書かれていることは、ときには非常に抽象的でイリュージョンに満ち満ちているように思われますが、すべて経験したことであると――。

別の世界、異界というものは明らかにある、ということです。それにいかに結びついていくかということが重要で、芸術はその一つの強力な方法です。今日は、レンブラントや世阿弥の例を挙げました。しかし、人はそれぞれ、自分なりの方法、水鏡があっていいというふうに私は考えております。さらに、日本人は日本人なりの、ですね。ざっとそのようなつもりでお話ししました。

2　霊性文明における対話――騎士道と武士道

【質問者】　伊勢雅臣と申します。今日は大変深いお話をありがとうございました。この後、班別討論でまたみんなで頭を寄せあって、先生の言われたことの真意をもう少し探っていきたいと思うんですけれども、その準備としまして一つお伺いしたいのは、霊性と大和心はどういう関係にあるのだろうかと。大和心と言いますと日本人固有の心という感じがしますけれども、霊性と言いますと、もうちょっと人類である程度共有された深いところにあるものという感じがするわけですね。日本人は霊性を、日本語と大和言葉と日本の歴史文化で染められた形で霊性を発展させ、フランス人はフランス人なりの、フランス語とフランスの歴史で彩られた霊性があるんじゃないかなと。霊性というのは深いところでつながっているからこそ、先生が上皇后陛下の御歌をフランス語に訳されると、それがやっぱりフランス人の、フランスの霊性に響いて伝わるんじゃないかなというふうに思ったわけですね。そうし

ますと、霊性というのは各民族それぞれの形でありますけれども、日本人が持ってきた霊性を先生は大和心と言われていると、そんなふうに解したのですけれども、そういう理解でもよろしいのでしょうか。

【竹本】　たいへん好いことを言っていただきました。おかげで、今日触れることのできなかった面を思いだしました。お配りした資料の中に、「武士道と騎士道の対話年表」があると思いますが、いままで両者間に対話が成り立つとは考えられなかったことなのです。なぜなら、事を歴史世界でしか見てこなかったからで、そのかぎりでは対話はありえません。

本当にありえないのだろうかということを知るために、両者の淵源から現代に至るまでの流れを、この表、一枚の紙の中に苦心して纏めてみました。ここから、少なくとも三つの段階で騎士道と武士道は対話しうるということが分かったのです。第一は、両者の「起源」とされる十二―十四世紀の時代。第二は「中興」の時代、これは十四―十六世紀ですね。そして第三は十七―十八世紀の「文武両道」の時代です。

大事な点は、東西間、主にフランスと日本で、互いの影響関係はゼロなのに、同時期にそれぞれ類似した高度の精神運動が起こり、それぞれ代表的な英雄が出現したという事実なのです。第一の「起源」の時期には、フランスでは聖ベルナールが、日本では北条泰時が、それぞれ騎士道と武士道のコード・ブックを作りました。「神殿騎士団の典範」と「貞永式目」ですが、共に「敬神第一」を謳っています。第二の「中興」の時代は、西にジャンヌ・ダルクを、東に楠木正成を生みました。ジャンヌは万年皇太子のシャルル七世を国王として即位させ、正成は後醍醐天皇を流刑地から京都へ還御させ、両者ともに、その赫々たる武勲にもかかわらず、ジャンヌは火刑台上、正成は湊川で悲壮な死を遂げています。しかも、互いに勇壮な騎馬像が至誠の鏡として国民から最も高く仰がれている点でも共通です。最後に「第三の時代」では、日本では宮本武蔵が不敗の剣客かつ孤高の画家として「文武両道」の鑑と仰がれ、フランスでは「剣とミューズ」を唱える「フランス王国最強」の黒人美剣士、シュヴァリエ・サン＝ジョルジュが著名音楽家として人気を

博していました。

これはどういうことでしょうか。

こうした驚嘆すべき類似性はこれまで人々の目から漏れてきました。歴史的にしか見てこなかったからです。そのかぎりでは類似性は「同時性」としか見えなかった。しかし実際には、それは「共時性」であったので、霊性的次元において類似、一致は起こったということなのです。

霊性とはどういう世界かと言いますと、共時的現象が起こりうる次元であるということです。霊性というものを考えなければこうした共時性の説明はつきません。ゲーテが言った「世界魂」があるかのようにも考えられます。人類魂と言ってもいいかもしれません。ユングが深層心理学の上から「集合的無意識」と呼んだことにも通じるでしょう。「コレクティブ・アンコンシャスネス」と。鈴木大拙は、これに対して、「コズミック・アンコンシャスネス」と言ってはいけないかねと反論しました。「アイ・アム・サイエンティスト」と言って否定しましたが、死ぬ前に肯定に至っています。こんにち、霊性と

いえば、この宇宙まで含んで意味しつつあるということが重要です。

あなたがご指摘のとおり、日本的霊性、フランス的霊性というものは確かにあります。大和心、フランス心ですね。しかし、それらをつつんで、両者が共時的に対話しうる広大な世界がある、それをも霊性の名で呼ぶ時代が到来したと言えましょう。

（第六十八回全国学生青年合宿教室・講義録）
大和心のかたちと秘密
——現代文明の変貌と真向かいて
竹本忠雄（筑波大学名誉教授）

非売品

令和五年十二月八日発行
発行者　公益社団法人　国民文化研究会
〒一五〇—〇〇〇一
東京都渋谷区東一—一三—一—四〇二
電話　〇三—五四六八—六二三〇
ＦＡＸ　〇三—五四六八—一四七〇